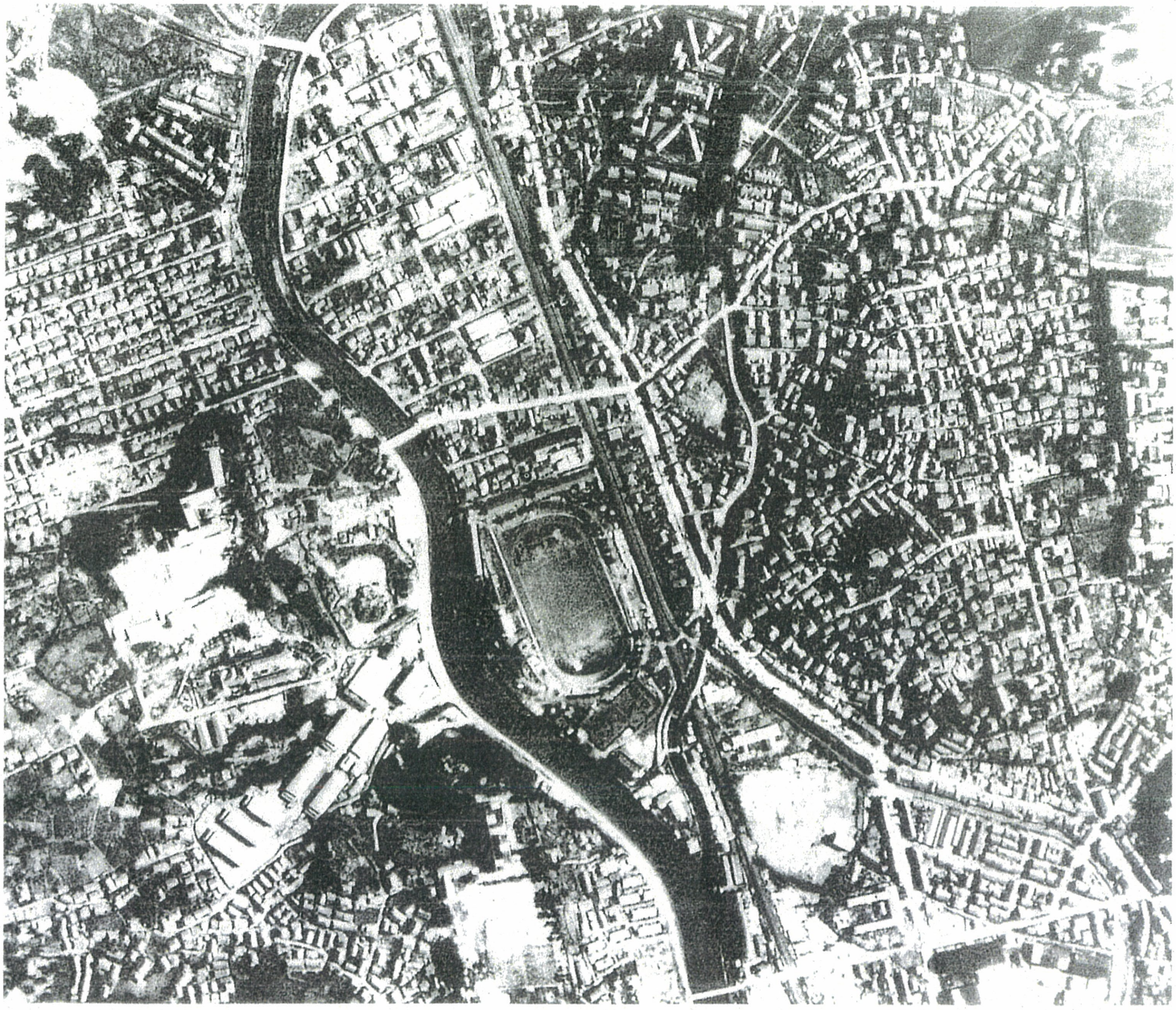
第2回原爆症認定制度の在り方に関する検討会	木戸季市氏提出資料
平成23年1月27日(木)	

資料１（長崎市『原爆被爆記録写真集』ｐ４）



被爆２日前の爆心地一帯〈米軍撮影〉

Hypocenter area two days before the atomic bombi
[U.S. Forces photogra

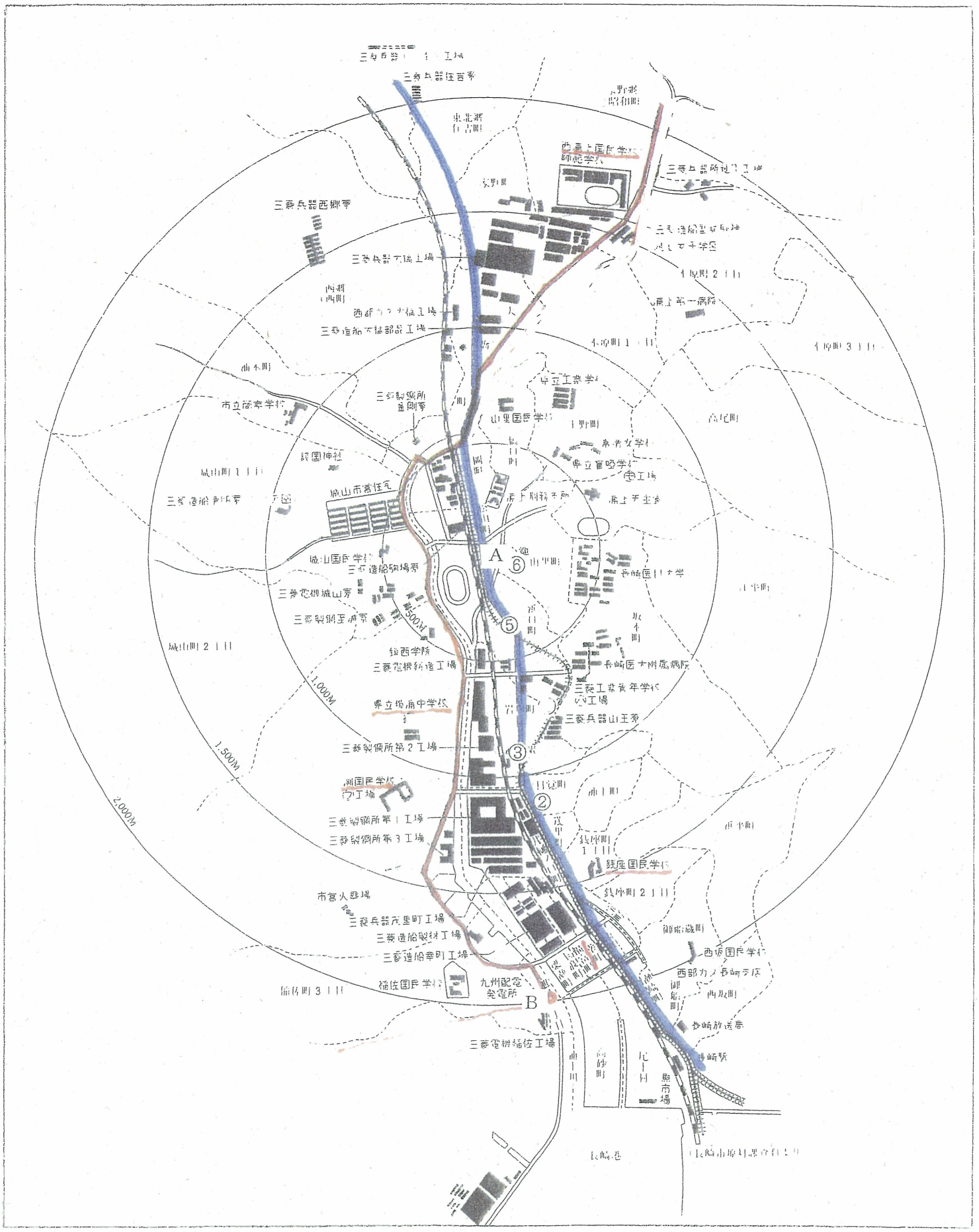
資料２（長崎市『原爆被爆記録写真集』ｐ５）

被爆３日後の爆心地一帯〈米軍撮影〉

Hypocenter area three days after the atomic bombing.
[U.S. Forces photograph]

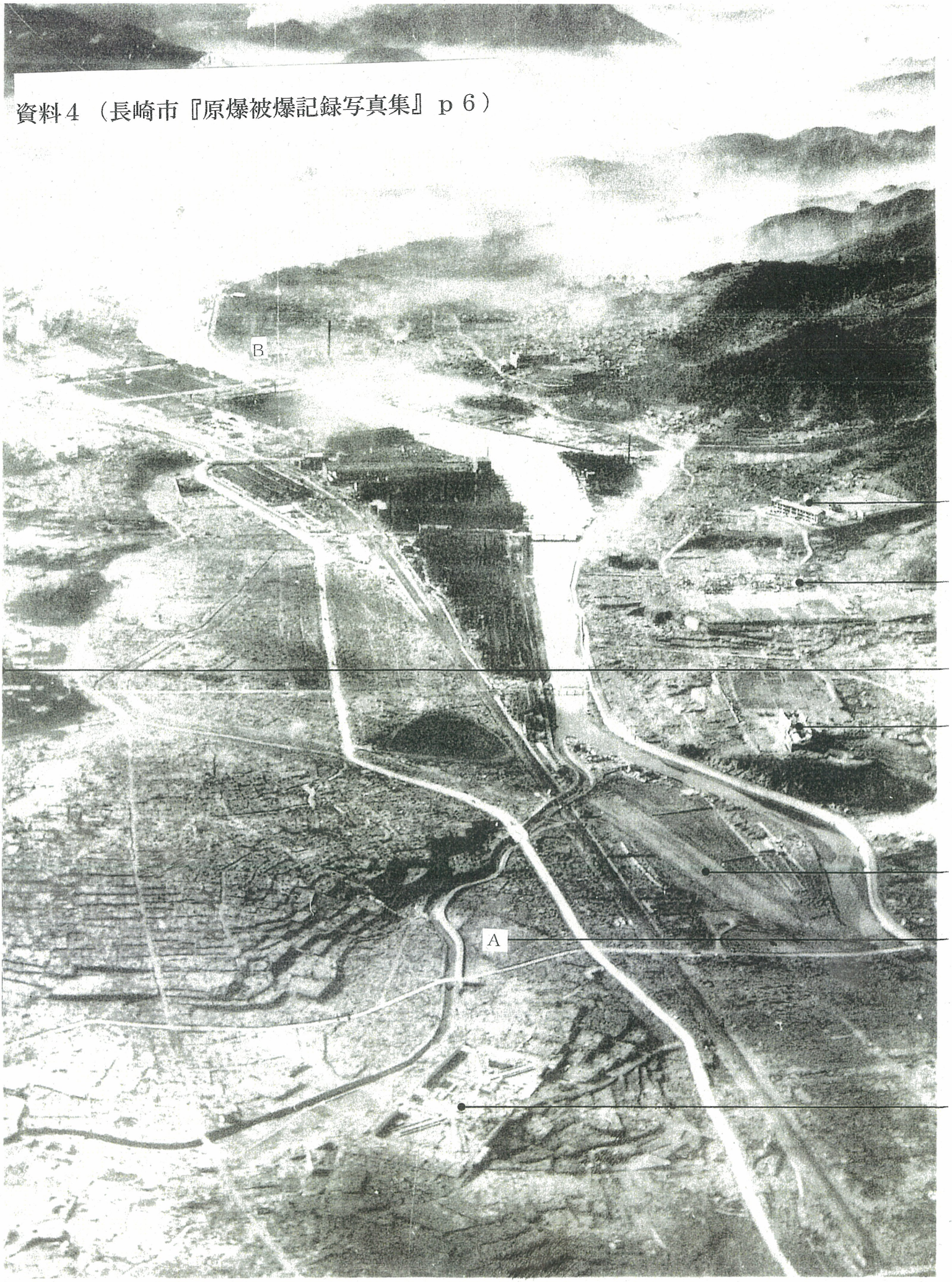
資料３

原子爆弾被災状況地図



当時の長崎市略図　同心円は爆心地からの距離を表わしています。　1945年８月　長崎

資料４（長崎市『原爆被爆記録写真集』ｐ６）



資料５—①（長崎市『原爆被爆記録写真集』ｐ１６）

炎天下にあてもなく救援を待つ負傷者たち〈山端庸介氏撮影〉

The injured languish in the heat, waiting helplessly for assistance.
[photograph by Yosuke Yamahata]

資料５―②（長崎市『原爆被爆記録写真集』ｐ１７）

浦上駅のプラットホームで死んでいた母子（誰がかけたのか、白い布がかけられている。）〈山端庸介氏撮影〉

A mother and baby lie dead on the platform at Urakami Station. Someone had covered them with sheets.
[photograph by Yosuke Yamahata]

資料５—③（長崎市『原爆被爆記録写真集』ｐ２２）

爆心地付近を走行中、爆風で吹き飛ばされた電車と散らばった乗客の死体（乗客のほとんどは「特設長崎地区警備隊」の兵士達。）〈山端庸介氏撮影〉

Corpses of passengers lie scattered near the wreckage of a streetcar that was passing through the hypocenter area. Most of the passengers were members of the Special Nagasaki District Security Corps. [photograph by Yosuke Yamahata]

資料５―④（長崎市『原爆被爆記録写真集』ｐ２１）

爆心地付近で焼死した少年〈山端庸介氏撮影〉

A boy exposed to the explosion near the hypocenter.
[photograph by Yosuke Yamahata]

資料５—⑤（長崎市『原爆被爆記録写真集』ｐ10～11）

死体が転がったままの爆心地付近（瓦はほぼ平均した大きさに割れている。）〈山端庸介氏撮影〉

Corpses are scattered in the hypocenter area amid roof tiles broken into fragments of an almost uniform size.
[photograph by Yosuke Yamahata]

資料６　原爆がもたらしたもの（1984.11.18　「原爆被害者の基本要求」）

原爆は、広島と長崎を一瞬にして死の街に変えました。

赤く焼けただれてふくれあがった屍の山。眼球や内臓がとび出した死体。黒焦げの満員電車。倒れた家の下敷きになり、生きながら焼かれた人々。髪を逆立て、ずるむけの皮膚をぶら下げた幽霊のような行列。人の世の出来事とは到底いえない無残な光景でした。

わが子や親を助けることも、生死をさまよう人に水をやることもできませんでした。人間らしいことをしてやれなかったその口惜しさ、つらさは、生涯忘れることができません。

いったんは死の淵から逃れた人も、また、家族探しや救援にかけつけた人たちも、放射能に侵され、次々に髪が抜け、血をはいて、たおれていきました。

生き残った人たちも「原爆」を背負いつづけています。

「家もなく無一物になり、何一つ楽しいことはなく、生けるしかばねです」「一生病臥の毎日です」「働こうにも人並に働けない。人からはなまけ者と言われるが、こんな体にしたのは誰なのか」。結婚・就職などの差別をおそれ、被爆者であることを隠し続けている人たちも少なくありません。

ちょっとした体の不調でも、原爆のせいではないかと思いわずらい、あるいはまた、いつ、原爆症が出るか、子や孫への影響は・・・と、胸に爆弾を抱えていたような毎日なのです。

原爆で肉親を奪われた遺族も、悲しみと恨みの四十年を生きてきました。

「身寄りが一人もいなくなり、故郷もなくなりました」「子供を助けられなかった親の悲しみは、死ぬまで続きます」「原爆の落ちた日から影も形もなくなった主人のことを忘れよというのは酷です。今でもきのうのことのように思い出します」「姉は、死ぬまで毎日が病気との闘いでした」。

原爆は、閃光とともに二つの街を壊滅させ、無差別に大量殺傷しました。人類が初めて体験した核戦争の“地獄”でした。

原爆は、今にいたるまで、被爆者のからだ、くらし、こころにわたる被害を及ぼし続けています。

原爆は、人間として死ぬことも、人間らしく生きることも許しません。核兵器はもともと、「絶滅」だけを目的とした狂気の兵器です。人間として認めることのできない絶対悪の兵器なのです。